

特集

早慶図書館システム共同運用

特集に寄せて

早慶図書館システム共同運用への期待

すだ しんいち
須田 伸一

(メディアセンター所長)

早慶図書館システム共同運用が始まって1年あまりが過ぎた。詳細は本号の各記事を参照していただきたいが、その中心はクラウド型の図書館業務システムAlmaと利用者用の資料検索インターフェースPrimoVEから構成される。このシステムはケンブリッジ大学、ハーバード大学などの海外主要大学で導入実績があり、世界標準のシステムといえる。ただし、国内においてはこの慶應義塾大学と早稲田大学の共同運用が嚆矢となった。

今回のシステム更新は、紙の資料中心の時代から電子の資料中心の時代に移行しつつある現在の大学図書館にとって、最先端のサービスを提供するために不可欠なものであり、同時に、国際標準形式の目録情報を早慶で共有することで、将来的な国際連携も視野に入れた取り組みとなっている。ただし、新しい検索システム（KOSMOSIV）については運用当初より利用者からの問合せや要望がいくつも寄せられた。いまだに解決されていない問題もあるが、早慶として開発業者を通じて利便性向上に務めているので、ご理解いただければと思っている。

さて、このシステム共同運用によって、早慶両大学に所属する研究者・学生は双方の蔵書や資料を一度に検索することが可能になった。また、新たな検索インターフェースでは、紙媒体の所蔵資料、電子媒体の契約資料に加え、Web上に無償で提供されている国内外の学術情報の横断的検索も可能になり、利用者にとっての新たな発見の可能性につながるものと期待される。

同時に、システム更新の取り組みを通じて、図書館職員の各種業務スキルが磨かれたことも忘れてはならない。メディアセンターは毎年職員を海外研修に派遣しているが、世界標準のシステムを慶應が採用することで、海外の図書館関係者との意思疎通が

これまで以上に実り多いものになったように感じる。また、システム共同運用に向けての数多くの会合を通じ、早慶両図書館の人的交流が進んだ点も職員のスキルアップにつながった。今後は、このスキルを維持し、次の世代に伝えていくことが重要であろう。

この早慶の取り組みに対しては、他大学の図書館関係者の関心も高く、2月25日に早稲田大学で開催されたシステム共同運用に関する合同シンポジウム「早慶図書館の挑戦」には、多くの参加者があった。慶應と早稲田が協力して、新システムの日本語環境での使い勝手を良くしていけば、日本におけるこのシステムの利用機関が増えていく可能性もある。

また、この合同シンポジウムでは、モンタナ州立大学図書館長のアリッチ氏が、モンタナ州におけるコンソーシアム、すなわち複数の大学が図書館システムを共同運用する取り組みについて講演された。欧米、そしてアジアにおいても複数の大学図書館から成るコンソーシアムがすでに存在している。日本と外国の事例を単純に比較することはできないが、日本においても今後コンソーシアム形成の動きが広がるかもしれないし、慶應と海外の大学図書館の連携への道が拓かれるかもしれない。

新型コロナウイルス感染症の拡大に伴うこの4月からのキャンパス閉鎖は、大学図書館への物理的な入館を不可能にし、利用者および図書館職員にとって大きな試練となった。一方、この異常事態により、電子資料の有用性がこれまでになくクローズアップされ、図書館資料の電子化が加速することが予想されている。早慶の新システムの特長を生かし、電子資源の分野においても早慶の協力がより一層深まることを期待したい。